

インドネシア GV 報告書

文責：柳谷晋輝

1. はじめに

GV (= Global Village Program) とは、国際 NGO 団体 Habitat for Humanity が主導する建築ボランティア活動である。Habitat for Humanity は、「A world where everyone has a decent place to live」の理念のもと、誰もがきちんとした場所で暮らせる世界を目指しており、今回のインドネシア派遣はその活動の一環として、同団体の日本支部、インドネシア支部の支援の下で行われた。

また今回の GV チームは、Habitat for Humanity 筑波大学支部である、当サークル LUZ と、同じく東京外国語大学支部のサークル Mrs から成り、LUZ にとっては初の、他大学との合同チームでの GV 派遣となった。

2. GV インドネシア派遣概要

派遣先：インドネシア、ジョグジャカルタ

活動期間：2019 年 8 月 31 日～ 9 月 12 日

参加人数：15 名（LUZ 7 名、Mrs 8 名）

活動内容：住居建築活動、及び文化交流

3. 日程

						8/31
						日本出国 現地到着
9/1	2	3	4	5	6	7
CA 1 日目	ワーク 1 日目	ワーク 2 日目	ワーク 3 日目	ワーク 4 日目	Community Learning	CA 2 日目

8	9	10	11	12		
CA 3日目	ワーク 5日目	最終 ワーク	最終 CA 現地出国	日本到着		

4. ワーク内容

ワーク日は、Habitat for humanity Indonesia のスタッフに作業内容を教わりながら、現地のスキルドワーカーや、完成した家の持ち主となるホームオーナーとも一緒に作業を行った。今回建てた家は、骨組みに鉄筋とモルタルを、壁にコンクリートブロックを使用した。尚、今回はチームを2つに分け、2ヶ所の家の作業を同時並行で進めていった。

作業① 「Digging」(1日目)

：家の基礎を作るための穴掘り。堅い表面を削りながら、敷地の指定された場所をスコップで掘り進めていった。全作業の中で一番の力仕事だったように思う。

作業② 「Cutting」(1日目、2日目)

：鉄筋を大型のニッパーで切っていく作業。規定の長さに合わせて鉄筋をセッティングする役目と、ニッパーを押して鉄筋を切る役目の、2人1組で作業を行った。切り分けた鉄筋は、作業③で使用する。

作業③ 「Bending」(1日目、2日目)

：作業②で切り分けた鉄筋を、専用の工具で長方形に折り曲げる作業。これらは、柱など、家の骨組みになる型枠の部品として、作業④で使用する。

作業④ 「Fixing」(2日目～5日目)

：切断していない鉄筋と、作業④で作った部品を針金で固定し、骨組みの型枠を完成させる作業。この作業は、ワーク2日目から最終日直前まで毎日行った。

作業⑤ 「モルタル作り・運搬」(3日目～5日目)

：家の基礎を作る際に必要なモルタルを作り、基礎作りをしているスタッフさん、ワーカーさんのもとにバケツリレーで渡す作業。モルタルは、セメント、砂、水を混ぜて作る。壁を作る作業⑦や作業⑨でもモルタルは必要なので、同時並行でこの作業も行った。

作業⑥ 「コンクリートブロック運び」(4日目、最終日)

：家の壁となるコンクリートブロックを作業現場に運ぶ作業。かなり個数が多かったが、全員で列になって声をかけながらバケツリレーを行い、運びきった。

作業⑦ 「壁づくり」(4日目)

：作業⑥で運んだコンクリートブロックを、モルタルを使用しながら積み上げていき、壁を作る作業。強度を損なわないよう慎重になりながらも、6段ほど積み上げた。

作業⑧ 「砂こし」(4日目)

：ふるいを使用して、砂利が混じった砂から砂利を取り除いていく作業。

作業⑨ 「モルタル塗り」(5日目)

：作った壁の内側にモルタルを塗り、きれいに仕上げる作業。壁の表面にモルタルを上手く付着させることに苦戦する人が多く、スタッフさんに何度もやり方を教わりながら作業を進めた。

今回私たちが携わったのは、前述の通り、壁を積み上げその内側にモルタルを塗る作業までである。それに、各作業全て私たちの手でやり終えたわけでもない。決められた時間内に終わらなかった作業が、次の日ワーク地に来てみると、スタッフさん、ワーカーさんによって終わられていて、さらに次の作業が進んでいる、というようなことが毎日だったからである。こう考えると、建築のスキルもない大学生が、ほんの少し家を建てるお手伝いをするにとどまる、このGVのワークの意味を考えざるを得ない。しかし、その答えの一つはホームオーナーさんが教えてくれたように思う。ワーク中、メンバーは現地の方々とよく交流していたのだが、特にホームオーナーさんはいつも私たちに笑顔で接してくれ、その温かさに、私たちの方が元気をもらっているのではと感じる程だった。それと同時に、彼らにインタビューした際には、言葉の通じない私たちに向けて、涙を流しながら必死に感謝の気持ちを伝えてくれた。ここから確かに1つ言えることは、私たちにとって、私たちが携わった家はただの家ではなく、かけがえのない、彼らと共に過ごした証だということである。そしてもし、彼らも同じ思いを持っていてくれて、完成した家を大切にしてくれたり、彼らが今後生活するための力になることができたりするのであれば、それは、私たち日本の大学生がインドネシアでワークを行った意味になり得るのではないかと思う。そしてその意味は、これからの私たちの行動でより濃いものにもできるのだと思

う。

作業①

作業③

作業⑤

最終日到達段階①



作業②

作業④

作業⑥

最終日到達段階②



5. Community Learning

今回の活動日程には、Habitat for Humanityのスタッフさんが用意してくれた企画を通して、インドネシアの様子や人を知ることができた一日があった。ジョグジャカルタでは長期間にわたって、今回のように同団体がボランティアを募って住宅支援を進めてきていたのだが、この日はまず、その一つである村のコミュニティーセンターや住宅を見学したり、現在実際にそこで住んでいる方にお話を伺ったりすることができた。そこでお話を伺った方々も、ボランティアとして訪れる学生に対してとても感謝をしてくれていた。

それから、現地の小学校を訪れ、日本語での名前の書き方や折り紙の折り方を教えたりした。そこで出会った子どもたちはものすごく元気で、彼らから元気をもったメンバーも多かったのではないかと思う。

また、用意してくれたレクリエーションや川遊びにも参加し、同時期に派遣された別の

日本のチームやスタッフさんとの友好を深めた。



コミュニティーセンター



小学校

6. Cultural Activity : 文化等を知る活動

今回の Cultural Activity (=CA) ではまず、ともに世界遺産である、ヒンドゥー教の寺院



群「プランバナン寺院群」や世界最大級の仏教遺跡「ボロブドゥール」を訪れた。また、インドネシアのろうけつ染め布地の特産品である「バティック」の下絵をロウで描く体験や、サイクリングをしながら、現地の豆腐やスナックを作っている工場やお宅を見学したり、伝統的な楽器である「ガムラン」の演奏体験をしたりすることができるツアーなどを通して、現地の文化を知り、触れることができた。

「ボロブドゥール」

完成した「バティック」

7. ホームオーナーへのインタビュー

今回のワークで作業に携わった家が2軒ということで、その2軒の家に住むことになる2組のホームオーナーさんにお話を伺うことができた。

1組目はご夫婦と子ども3人で暮らしているお家で、安定した職はなく、時期によって

は農作業のお手伝いをして生計を立てているが、それでも1日500円に満たない収入だと言っていた。これまで使ってきた家は基礎に不安があり、雨漏りもしてしまうそうだ。

もう1組は3世代7人で暮らしているお家で、現地の料理を販売して生計を立ててはいるが、こちらも収入は1日500円前後だそう。子どもは3人とも学校に通わせるつもりだが、学費を払えるか心配していて、家も古く7人で住むには狭い、ということだった。

厳しい生活だということは言うまでもないが、そんな中私たちが優しく迎え入れてくれた彼らの温かさを改めて感じ、新しい家が少しでも彼らの希望になることを願っている。



インタビューの様子①



インタビューの様子②